本

氣

質

特43
653

特43
653
№16174

○第十二圓

却て說く神保六輔ハ年ごろ日ごろ搜索めし俱ゑ天を戴だかざる父が仇敵の大岡正治が彰義隊の群ゑ入りしと聞き今さらゑ猶探べき或夜ゑ紛れて主家ある大野屋を密かゑ脫出し人知れず床下に隱しをきたる準備の兩刀さすがに猛き武士の種ありけりと自然ち備はる勇氣凜然と丁稚姿ゑ引換て身輕の形裝花々しく兼て準備やしたりけん白の稽古衣義經袴股立高く取上て暫しわが身を忍ぶヶ岡上野をさして急ぎゆき從兄弟なりける本多金一が朋友ゑて其身も嘗て見知り越なる彰義隊の指揮長古屋何某に就て入隊したき旨を言入しに軍律規則も暴志雄が烏合まりし事なれは去る者ハ止めを入る者ハ拒まず徒ゑ虛勢を張るをもて得たりと思ふ暴徒ゆゑ思ひしよりもいと容易く請

ふがまゝ〳〵六輔の入隊を差許し谷中口を固めの人數ゝ加へられぬ此時大岡正治ハ黒門口の固めとして同所三十六坊の一寺本覺院ゝ屯集あせバ六輔ハ仇敵の樣子を搜らんものと折々訪れ夫といあしゝ父を宮ちたる當時の樣と尋ねしゝ隱すかと思ひの外。詫れど聞ぬ敵手の無法喧嘩ゝ冠る笠ハなく頭上ゝ閃めく白刃を遁んと思ふて打拂ふ拳狂ふて思はぬ腕立由あき事をしてけりと臍を噛ども詮術あしゝ包まず洩らさず打明て語り出たる丈夫の魂しひ偖ハ父上が自から釀せし災厄ゝして仇敵と睨ふ正治の方こそ理の當然と今更ゝ悟て見れバ六輔も勢ほひ込だる拳弛み撃も面伏せうたぬも不孝いかゞハせんと左思右思苦き心を取直したとへ如何ある事實ありとも父をうちしハ正しく大岡やはかそのまゝ生かくべきといとも健氣な樣子の決心首尾あれかしと待つをりから降み降らぎみ五月雨の頃ハ明治元年五月十

日の夜昨日も今日も降しきる軒の玉水涙の雨四方ひつろとなる鐘もうしとも見つや丑滿の草木も眠る眞夜中すぎ番兵の遙を窺がひ本覺寺の庭先より忍び寄たる神保六輔案内知つたる樣側傳へ大岡正治が起臥あす書院の一間を窺がへば中にハ燈火いと明く書を讀む聲幽ゝ聞ゆ暫らくありて燈火を置かへ座席の位置を換ーと見え障子にあり〳〵映る人影只一うちと引拔く一刀片足あげて蹴開く障子「親の仇たる大岡正治觀念せよと大喝一聲席を蹴立て斬入たり

○第十三圓

編者曰ク神保六輔が彰義隊の群ゝ入たる時吾が素性を悟られまじと假ゝ宇千木一三と變名ーたる事と前回ゝ掲載すべかりしを洩ーたれバ爰ゝ記す看客ろの心ーて讀たまへ

誰かと思へバ宇千木一三わが身を親の仇敵と呼ハる事めづらーき足

下の問狀ろもまた如何なる事由ありて「ヤア卑怯なり大岡正治。宇千木一三といふ假の名實い先年汝がためよ隅田の堤ゐてうち果されし神保六太夫が遺忘の一子同苗六輔といふ吾が事あり幼少時故ありて母もろともゐ家を逐はれ町家に成長りたるゆゑ父が最期も知らざりしが從兄弟本多金一が房情よ依て云々と聞し時の口惜さ爭汝をうち果し父が怨を報はんと爰よ始めて復讐の望を立て汝が踪蹟捜り索めし此の年月吾もろの時不意なく通り掛し天神社内よしゐの影ゐ佇立て聞ともるしゐ足下等二人が往昔を忍ぶ長物語〇偖い其折吾倘二人が秘密を聞て我もまた扨い先年うち果せし彼武士の遺子なりーか如何なればまそ怨もなきゐ僅少の事より人を殺し斯まで怨を結びしやらん遲かれ速かれ足下等二人ようたるゝ事とその時より既よ覺悟い決まるものかゐ思ゐ仔細のあるをもて水濱を脫走ー該隊中よ入りたるよ昔

日おん身が入隊の後我よ親しく語らひしより問はるゝまよ〳〵包み隱さず當時の況を語りーよ足下の顏よ自づから顯いれたりし怒りの容体扨ころ我を付睨うと疾くもろの機を察し居たれば今更驚ろく我ならねど今い汝ようたれぞたかり「トハまた何故よ「その事由遲て語り聞せん暫らく時の來るを待ねトいふよ急立つ六輔い扨持つ白刃と取直し妖言を以て我を惑いしろの期を延して逃れんとす卑怯未練な汝が佞辨今さら聞て益なき繰言ィザ尋常よ勝負せよと握り詰たる拳の汗よ目釘も濡る生死の際正治い騷がず例よ有合ふ見臺かいやり鐵扇紛よ端然と坐を定めて身搆へつ吾もまた男兒なり此期よ至りて逃かくれんや去れどもおん身の疑心深く左言るれば是非もあしィザ充分よ斬込れよト更よ動せぬ不敵の面色「オー言よや及ぶと血氣の六輔一心凝たる太刀尖鋭どく二つよなれと振下す刃の下ころ地獄あれ正治

の身體ハヤ今まつ二つと思ひの外ひらりと反を手練の迅業是に至りて二人が勝負什麼また如何なる話頭やある次回ゑ解を聞ねかし

○第十四圓

六輔初太刀をうち損じ益々焦ッてうち込む白刃を右ゑ開き左ゑ閉づ正治が手錬の拳狂ハず鋭扇をもて丁々と受つ流しつ稍ゑ〳〵敵を疲らし曳と一聲劍の下を掻くゞり迅くも手許ゑ付入つ六輔が右の腕を丁と擊たる飛鳥の迅業急所を擊れて思ハぎも落す白刃を取直さんと延す腕を又一うち落る白刃を鋭扇もて確手と押へて動かさずいよいよ〳〵焦立つ六輔押へられたる刃を取んと諸手を掛て引ども押ども大磐石をもて壓せし如く千曳の綱手ゑ掛るとも更ゑ寄べくもあらざれバ切齒をなして睨まへたる怒りの面色朱を沃ぎ刃を捨て飛掛り組んとそるを寄付ず利腕取て頭轉倒投付られて六輔ハ重ね〳〵の

不覺を取り無念〳〵と起上り見れバ正治ハ端然と彼方ゑ坐を占めからゝと打笑ひつゝ言るやう「今おん身を此處ろゑ返りうちゑあさんといと容易き業なから我一命ハ既ゑはやおん身ゐ取らする覺悟ゆゑ此場ハこのまゝ物別れ心長閑ゑ待たまへ頓ておん身にうたれつべーと心あり氣ゐ詞の端々六輔心ハ迅れども敵ハ名ゑ逢ふ武藝の達人今の手業ゐ敵しかね我身と悔みて歎息し彼も箇程ゑ道理を分け徒ゑろの期を延んとするハ要ころあらめと默頭くものから晴ても晴ぬ迷の雲「然らバ汝が請ゑ任せ暫しが間汝の首ハ汝の胴ゑ預けおのん卑怯未錬ゑ逃なせぞ「勇ましきかな足下が一言いふにや及ぶと益良雄が契す詞の玉霰碎くるろの期を延しつゝ白刃を鞘ゑ納めても納まりかねし兩雄が角芽立たる蝸牛の爭ろひ果し奈麻與美の腕を扼て左右物別れとてそゐりたりしが六輔心安からず彼奴我を欺むきおほせ油斷をさ

せて逃やせんかと眼を注て窺がひつ寐首と搔んか待て来ぺし彼も中々油斷あるまじ生じいよ手出して由なき事をしてけりと我身の武藝よ拙なきを悔る外なく如何ゐしてうち取らんかと便少なき孤子の語らふ人も嵐ふく峯の松風音凄て八千八聲鳴つくし血を吐く思ひ時鳥思按の中に日數經て頃い五月十五日雨さへいとゞ降ゑきりまだ明やらぬ小夜嵐の梢を洗ふ音ならで霹靂一聲坤軸も崩るゝぺかり大砲の音もろともゐ湧が如く一時ゐ起る鯨波何の間にやら寄押けん官軍の總勢壹萬餘騎忍ヶ岡の四方を圍み只一攻に攻落さんと短兵急よ攻寄たり

○第十四圓

是より先東台よ集まる彰義隊の内よい心中誠義純忠ならぬも一時の虚威と振いんと隊よ加はりたるもあり或は糊口と凌ぐ迄よ只口實よ

義を唱へて黨派に入たる族もあれぺ夫等い官軍撃ふときくより臆病風の身よ染ひて咸夜よまぎれ扳〳〵よ行衛も去れず落武者の後と見するも頗る多く初めの程い三千餘人と聞えし人數も過半い落失せ軍機頓よ挫けしものから千よ餘る決死の若武者疾や防禦の部署をなさんと黒門口。屏風坂。谷中天王寺口等八ヶ所の口々を固め來れや應と待間あらせず諸藩の官軍四方より錦旗を押立て押寄來りはや職端を開きたり彰義隊の慓悍ゐるしぺ〳〵官軍を擊なびけ大よ勝を得るといへど衆寡敵せど其日の午過き谷中口を擊破られ稠入る官軍雲霞の如く鋭どき敵の鋒先ゐ當り兼つゝ後へ〳〵と且戰かひ且走る彰義隊のろの中より現いれ出たる一人の暴比雄先刻よりの戰爭よ敬ヶ所の手疵を負しと見へ鉢鐵入の白鉢卷も紅よ染なし滴る鮮血を拭ひもあへど血刀を打振〳〵聲高く我い大岡正治なりと告名りけつゝ官軍

の群がる中へ斬入たる勢ひ夜叉の荒たる如く向ふ前のあらざれば勝誇りたる官軍も只この正治一人が爲に斬まくられて亂れ立つ折しも官軍の中よりして下田大膳といへる者夫と見るより躍ケ出で持たる太刀を閃めかして名掛つゝ馳向ひ一上一下と斫結ぶ双方手元の勝負とあり入亂れたる敵味方が一歩も引かぬ奮撃突戰焦ッて撃込む下田が陽の太刀をば大岡が淪んで拂ふ陰の太刀風ひらめく電光と倶に血煙立て下田の首は遙の彼方に飛び身骸は撞と倒れたる流石千葉の高弟と音に聞えー正治が働らき目覺しくもまた勇ましゝ却つて說く神保六輔は言甲斐あくも過つる夜仇敵正治を打損じ不覺を取ー口惜き如何にもーて撃取らんと心を惱ます折もをり不慮の戰爭起りしかゞ余儀あく防禦の隊に加はり頻りに官軍と戰かひしも大望ある身は命惜く空ーく爰で戰死せゞ泉下の父に見みゆる面目あー此時に

ころ撃ざれゞまた何時をか期そべきと入亂れたる敵味方の彼方此方を斬拔け突拔け正治が踪蹟と尋ぬれど絶て在所の知れざるより獨り熟々思ふよふ如何あれたこそ我運命の斯までに拙おきやらん現在仇敵に逢あがら却つて讎敵に後れを取り今また彼の踪蹟を尋ね撃うたゝは時の運たゝ潔ぎよく死を決せんと思ふにも似ぜ彼はとや戰死せーか落延ーか問糺さんにも敵の官軍亂入ーたれゞ夫さへ叶はず仇敵の安否を知るまでゝ蛋よも刺せぬ大切の身体一旦この場を落延て後せん術もあるべきゝと思慮頓に決せしかゞ踵を旋ーて樹間傳ひ人あき方へと落て行く後の方より思掛あく「六輔殿待れよと呼留たるゝ何者ぞ次回に解を聞ねかし

○第十六回

其時既に黃昏過ぎ雨脚繁く天近く寐棲へ急ぐ小鳥もいとも激しき大

小砲の響きよ驚ろき飛去しか茂林を離れて寄付す宵闇あるよいとゞあは暗きを辿る木下闇道の泥濘を蹈しめて人あき方へと落武者のさして行衛も定めあき仇敵の安否と知るまでゝ我身よして我身あらずと思ひ直して樹の間傳ひ見咎められじと落てゆく後の方より思ひ掛けあく「六輔どの待れよと呼止られて驚ろきあがら何者あるかと振顧り見れゞ嬉しや欣こゞしや瞬間も忘れぬ親の仇又かの大岡正治あり先刻よりの戰爭に酷く手疵を負しと見え朱に染成す白鉢巻鮮血淋漓身体を浸し六輔を見て漸々と刀を杖に寒り寄り「最前よりおん身の行術を其處か彼處かと尋ぬる中流彈丸に膝頭をうちぬかれ思ゝずも此處に倒て悶絶せしが樹の葉を洩て滴たる雨の口に入しか蘇生り四方を見ゞ味方ゝはやうち敗られて路失しか一人の影だに見えざれど敵も流石に殘兵の計畫もやあるらんとて徒よ四方を圍むのみ獵に圍入せ

ざる樣子戰爭既よ果しと覺し疾や最期を急がんと思ふ折から不意あく彼方を過行くおん身の姿闇よもそれと透し見てト言ふゝ六輔不審顔「我も汝が踪蹟をゞ彼方此方と尋ねしが汝も我を尋ねしとゝ开もまた如何なる事由あつて「去ゞあり過つる夜御身ようたれて死すべかりしも元を糺せゞ些細の事よりおん身の父を殺めたる罪ゝ逃れぎ其子たる御身ようたるゝ覺悟あれど今日あるを豫知したをゞ此世の思出ゝ花々しく敵よ一泡吹せて後潔ぎよく擊れんものと思ひしゆゑ斯ゝその期を延せしなり今ゝはや何事も思ひおくと更よおし我首擊れよ六輔どのと言も苦しき終焉の呼吸勇士の覺悟ぞ目覺しき六輔漫よ感嘆し如何あれゞまそ我父ゝかゝる壯士と爭鬪して由あき最期を遂たまひき仇といいへど可惜しき老先長き盛の花を散らす無常の小夜嵐心苦しき限よころと腕も弛み心も挫け猶豫ふ樣子よせき立正治「今更

何を猶豫ひたまふかん身の爲よれ現在の親の仇ふれ候れをや女々しき舉動ひなさずもあれ左まで我と哀みたまはゞ遺託すそべき一儀わり我薄命よして幼少き時父母に別れ只一人の妹ありしが是さへ年五歳の時勾引されて行衛しれず生死も定かふ知り得ねど若し生存てわらんふれ嘸や便なく思ふらめふん身若し我妹ふ回り逢ことのありもせゞ此等の事を傳へてたべ死後の望れ只是のみ挨々首を刎られよト言れて默頭く六輔れ白及と心を取直し汝の遺託承諾せり擊も物憂し擊ぬも不孝觀念せよと閃かす及の光り草叢よパッと群立つ螢火の夫かあらぬか一刀兩斷首れ前よぞ落よけるよそのみるめもわわれあり

○第十七圓

神保六輔れ多年の大望時機至りて親の仇敵を擊取りたる嬉しされ如何ゞかり又よく思へゞ仇敵とれいへさしたる怨もわらざるよ起源を紀せゞ僅少な事より互よ解ぬ怨を結び可惜有爲の益良雄を及のさびと野邊の露消て跡無身の成果擊うたるゝも天あり命なり今更また何をか歎き何をか患へんと漸やくよして思ひ直し血刀拭ふて六輔れ四方見廻し鞘よ納立去らんとして思ふやう正治が首級を捨おくときれ空しく敵の手よ入て祭られぬ鬼とやならん責て首級だけ理めやらんと頓て小刀を引拔て傍の土を三四尺辛くして鑿穿ち首級を埋めて元の如く上より土を覆ひつゝ見顧はされて發かれじ何まれ重しに乘すべき石とト見顧る彼方わ幾個となく立併べたる石燈籠あり是屈竟と立寄て遙かよ德川氏の靈廟を拜し力よ任せて推と齊しく瓦落離堂と地響きて倒るゝ音と侶俱に動と一發飛來る敵か味方か放つ彈丸六輔が左の腕をかすりて後背の松並木へ當りて落る一丸敵ありけりと六輔れ身を屈まして石燈籠の蔭よかくれて敵の多少を窺がふとも知る

や知らずや再たび放つ炮聲と俱ゑ倒さし人こそあれと樹立の間より悠然と顯はれ出たる一個の荒比雄大刀腰ゑ挾はさみ右手ゑ鎖砲ひつ提たる全身朱ゐ染成て四方に屹と目を配り此方をさーて徐々と歩み寄來る面魄しひ善か惡かい知らざれど凡人あらぜ見えてけり此時既ゑ日い暮て雨晴たれど天曇り咫尺も分ぬ樹下闇六輔い最前より敵を近付けうち取んと刀の柄ゐ手を掛て空死あーつ倒れ居たるが敵近付ぬと思ふより勃然と跳起き引拔く秋水及の光ゑ彼方もまた敵ありけりと飛去さり鐵砲あげそて大刀のつかゑ手を掛け拔んとする此時迅く那時遲し飛鳥のごとく飛込來るいとも釵どき六輔が及と鍔もて丁と受とめ敵の手元へ衝と寄て下から拂ふ手錬の手方肱を撃れて思いぞも迚地〳〵〳〵と蹌踉く六輔折しも雲間を洩出る月の面ゑ照されて双方一齊く見合す顔「先生あるか「左云ふい六輔。這い〳〵如何ゑと

猶豫ふたるそも此人い何者ぞ次回ゑ解を見て知り給へ

○第十八圓

さても〳〵如何ある人ぞと能ゑ見れば件の武士い別人あらぜ六輔が撃劍の師と頼みたる榊原健吉あり迭ゑ敵と思ひーゑ敵ゑいあらず不思議ゑも師弟の縁ー盡すして硝烟彈雨の修羅闘場ゑ必死を免がれ今此處で再會なーたる双方の喜悅事の理源を尋ぬるゑ榊原健吉い彰義隊の長なりける永井玄蕃の招きゑ應じ此戰爭の起る前日い則ち五月十三日入隊あしつ忍ぶが岡へ馳加いりたる事あれば同じ隊中ゑ在ながら六輔も健吉も師弟もろとも一山ゑ在とも知らでいと激しき亂軍の中を斬ぬけて落延んとあす折しも偖こそ再會あしたるなり是ゑ至りて六輔い傍の株ゑ腰うち掛け親の仇なる大岡正治をうち取たる顚末より我身の素性い言ゑ及ぜ宇千木一三と變名して茲隊中に入たる

事まで洩さぬ餘さぬ物語る言葉雄々し。て肝向ふ心の限り說盡す間度ごとに健吉い耳新らしき仇擊の本意を首尾よく遂したる愉快の談柄に思いぬも小膝を打て感嘆し「我か眼暗くして足下をかゝる孝子あり と知らぬに過せし面目なさよ苦心左ころと今更ゑ思ひやられて痛さしく始めよりして斯と云りあば師弟の情義ゑ及ばずながら助太刀なして得させんもの告げられぬこそ遺憾おれとい言へ首尾よく大望を遂たる上い此處ろゑ長居い無益敵方ゑ見咎めらるなば悔しからん我い素より戰死と思ひ定めし事なれば今更命を惜むゑあらねど味方の人を後安く落延させた然る後聊か思ふ仔細もあれば一人此處ゑ蹈止まり殿戰おーてあるからい此處搆いずと少しもはやく何なりと落延よ疾く〳〵と迫立る情も厚き師の詞ゑ感激なしてはふり落る涙の雨か一平天い晴てもかき曇る胸い憂也憮也定めかね左右の返答もあら

ざりしが屹と心を取直し「先生を打捨て落延るい本意おらねど既ゑ戰死と御所存の定まる上い今更ゑか止め申すも詮なきのみか宵に吾倩一人を落さんとての業ゑもわらじ今しもお說し申せし如く仇敵正治が終焉の遺託を承諾たる丈夫の言葉い金鎖同然彼が妹の生死を糺し承諾たる遺托の一義を果さぬ上い輕々しく捨る命ゑあらざれば貴論ゑ從がひ落延ん師弟の緣盡ざれば重ねて再會の期あらんか言も嗚呼ゑい候らへども强がち戰死と急ぎたまいぞ必らずおん身と大切ゑ「言ゑや及ぶ其許も堅固で「先生御無事でト起上りしが去難つ因緣も深き師弟が生別是が死別と又更ゑ歎きもいとゞ益良雄が止まる人を誘なひかね行く人をしも止めうねたる涙拂ふて去らぬとばかり見顧る六輔見送る健吉行と左ゑ別れ路の樹間ゑ隱れて六輔の姿い迅くゝ見ゑすなりぬ

○第十九圖

却つて説く六輔ハ心あらずも擊劍の師なる柳原健吉に別を告るるの間も四方ハ敵の官軍充滿蟻の出づべき穴さへあきを如何よしてか脱れ出でけん姿を變して忍ぶヶ岡を辛くも落延び千住自陸羽街道と迚りつゝ畫ハ山野よ潜伏し夜を込て足ょ任せ奥羽を指て走る程ゐ日數を經て會津なる若松城よ投せしよ驛よ上野を落延たる味方の諸士も此處よ集ひ會津の藩士ともろとも孤城をまもる必死の猛勢一時官軍の追手を引請けゝば〳〵むかへ戰かひつれども順逆いかでか敵し得ん會津藩主も昨非をさとり城をひらきて降服のゝち六輔ハ同志とゝもよ函館へ落延び五稜廓の戰かひ破れ複本等と倶〳〵に東京へ護送されお調べの後罪を免され青天白日の身となりしハ明治元年の事よして世ハ王政と一新まり田安慶頼の長男龜之助（現今徳川家達様）をし

て宗家と繼しめ駿河よ遷さる是ゐ於て麾下の諸士住なれ一江戸を捨て皆靜岡へ移住ゐそよゞ六輔もこの時よ靜岡へ移住ゐ一此地よ四年を過ゑつゝ明治四年七月廢藩置縣の令出て靜岡縣とゐりし時六輔ハ同縣の權少屬よ登用さを一も思ハしからぬ處ろより間もゐく辭職一て商人とゐり元來世事よ怜悧き六輔或人より若干の金を借得て同所ゐる宮崎町の市街へ勝文堂と家号を呼び書籍店を開きたるよ迎よ叶ふてゐひ〳〵に繁昌ゐ一て兎やら角やら樂よ活計の立ものから何ゐよ付て男一人ハ嘸かし不自由多かるべし妻女と迎へ給ゑやと屢々勸むる人ゐれど六輔ハ承諾ゑ只うち捨ておきたまひねトいつも同じき回答のみ果ハ世話する人々も外見ハ堅く見ゆれども何處ゞに大方隱し妻の圍ふてあるゆゑ吾々が詞を聞ぬも故こそあらめと口を箝みて物言ぬ人の邪推と大ちがひ堅氣一圖の六輔ハ浮たる心更よなく家業

大切と勵み居たるが有一日の事商用よて同所の遊廓二丁町を通行なせしろの折から日も西山よ呑つきて諸行無常と告渡る入相の鐘哀れと送り淋しさ勝る逢魔ヶ時夫よ引換へ花あらぬ六輔も坐ろよ心浮立て彼方此方と見ろや花街の夕景色水石ならぬ六輔も坐ろよ心浮立て彼方此方と見顧りながら軒下傳ひ歩む眼先へからりと音して落散る一品心ともあく拾ひ取り見れば女子の花簪あり梅花の香ひ奥ゆかしくろも此主い誰なるかと見上る二階の柱よ倚れ往來を詠めて起たる美女見上げ見おろす顔と顔迭ゐ莞爾笑たる折から年齢二十餘の中居と覺しき一人の新造忙々し氣よ樓先へ走り出つゝ簪を拾ふて起たる六輔の傍よ立寄り會釋しつ「今花妓が落した簪もしや貴郎のお頭部よでも中りいせぬかと花妓もいつろ案じて私くしゐ為詫を申してまゐれとの事どうぞお免しあされてと流石ろれ者の艶辨もよく愛敬ろくば莞爾〳〵と

笑と含て打詫る六輔い迷惑顔「是いしたりお詫でい却つて恐れ入ます
る何もまの簪が私の身体に中つたでいあしー眼先へ落ちたばッかりで
思はぞ見上る花妓の美しいお顔を拜しよい氣晴しを致しました是を
御縁よいづれ近日お目よ掛よ上りまそのら其時いお厭でも優ろい詞
を掛て下さいとお前から花妓へよろろく傳へて下せへト言ば中居も
笑ひあがらあのマァ旦那の程のよいと是でい花妓の見惚たもほんよ
無理でいござんせぬろんあら旦那お近い内「嫌がられよ登ります「お
騙しだと聞ません屹度ですヨと契す詞を聞流して六輔い幾回となく
回顧り心殘して急ぎ足我家をさして立歸りぬ」現よや男女の緣はぞ世
お怪きものいあらじ思ふよ離れ思いぬよ合ひ思いぬ思ひよ思ひを焦
し我ならなくよ心の駒の手綱弛みて走出ず菩提の鹿い足掻を止めず
煩惱の犬い逐ども去らず迭よ臭體を抱いて眠る皮一枚の快樂よ身を

忘るゝころ是非なけれ去程よ六輔ゝ小松樓の出稼娼妓薄紫を見染てより寐てゝ夢起てゝ現まぼろしの眼先よちちつく戀人のろの面影の忘れがたく平生堅固き性質も温柔郷里の夢枕覺ての後ゝ兎も角も爭で一度かゝる美人を手折るよ難き事やおると思ひ凝てゝ中々よ商賣用も手よ付ぞ浮れ出しも道理なるゝ亦开もこの薄紫といへるゝ縹致といひ氣立といひ大都會の花柳よも稀なる風致と備へたれゞ全盛駢ぶ方亦く美人の名ゝ二丁町の遊廓と歷し氣ゐ染ぬ客人よゝ假令如何程金を積とも嘗て心よ從ぞのゝず我儘亦からも檻式ありゝゝる全盛の君亦れど思へゞ思ふ不思議の緣以心傳心見契す顏ゐ夫ぞ通ぞる戀の電氣此方もまた六輔を憎からぞ思ひ染め近日行くと中居より傳へし詞を心待ち今夜か明日かと焦れ居たる後の話しゝ次回に讓る

○第二十圓

九年面壁何ざんす苦界十年ゐ客を壁と睨み破身ゝ蕚の夫ゐらで憂節繁き河竹の流よ立る意氣地の魂膽見性成佛の闇の中以心傳心の格子先吸付烟草の雲となり流連日和の雨とゐる迷ふゝ本來無分別離るゝ心外無分別法柳ゝ翠花ゝ唐紅禪味よかよひくゝるゐの客人現よ客中ゐ客なく傾城よ傾城稀なりと故人式亭三番叟がものされしを宜ゐる哉去説小松樓の娼妓薄紫ゝ夜毎日毎よ通ひ來る客足しげきも心の下紐うち解け語らふ人もゐく不圖六輔を見染てより假令末ゝ遂ぞとも一夜ゐりともうち解て語り明さゞ嬉しからんと我から誘ふ浮氣れ水性合た木性の合緣奇緣男も素より憎からず思ひ初しよ迷の種まき互よ思ひ思ゝれつ思ゝぬ思ひよゐのこがれて或一夕六輔ゝ思ひ切て小松樓へ登る二階ゝ戀の山待焦れたる戀人の名指で來しと聞からよ嬉しくも又耻かしく色よ手馴の苦勞人も心ゝ變ゝらぬ生娘の飛立つ胸

とおしまづめ裾衣姿さとやかゝ初會の引附秋波ゝ男の方をうち見遣る一眸ゝまだゝる愛敬笑壓座敷をとり持つ藝妓の機轉チト彼方へといふと機會ゝ酒宴もほどよく切あげて藝妓仲居にいざはれ屏風の中へ入る月の影ほのくらき枕邊に行燈片寄せ左樣あら花妓よろしくト異口同音ゝ言ひつゝ起てもく跡ゝ宛がら風のなさたる如く内ぞ床しき睦言の如何なる夢をや結びけん看客よろしく察したまへ。あひ見ての後の心ゝ比ぶべ床しさまさる昨日今日逢たび毎に深くある雨個の中ゝ日ゝ月ゝ思ひ增穗の篠すゝき招く尾花や女郎花露の情ゝ濡燕濡ゝぞ濡て通ひ路の重あるうちゝ其年もいつしか暮て翌年の春もはや過ぎ夏の夜の涼風吹入る小松樓ゝ結ぶゝ夢か幻しの薄紫が坐敷の樣ゝ繪樣ゝ讓りて細かゝ說ず且說或とき六輔ゝ薄紫が謀まちて取落せし守袋を手ゝ取あげて中を開き見やうとするを薄紫ゝ狼狽てゝ

し止めアレサ夫を見てゝ。惡いと云ふ六輔ゝハゝア讀た言葉した情夫の起誓であらうと厭味の詞聞よりせき立薄紫。ろんゝ人がある位ゝら何でお前はんと此樣ゝ餘計ゝ苦勞をするものかゝ夫程私しを疑ぐるゝら能く改めてお見ゝはいト其まゝ渡す守袋六輔ゝ笑ひなゝら中を披けゝ神佛の札ゝゝゝらで臍の緒を包みし上ゝ安政三辰年十月三日出生水戸藩大岡主計娘たまト記しあるを見るよりも箇ゝろも如何ゝと呆れ惑ひ腕叉ぬき、て茫然と暫し詞もゝかりけり不思議と言も愚かゝり

○第二十一回

思ひきや薄紫ゝ我父、六太夫を擊果しゝ大岡正治の實の妹彼正治が最期の際ゝ我ゝ托せしものなりとゝ扨もく〳〵とべかりゝて左右の詞もあらざりしが稍ゝあつて形容を改め。世ゝも怪ゝき兩個の因緣ゝん身

の素性ゝ此の臍の緒にて大凡ゝ知られよき先づ我身の素性より逐一語り聞せんと身の成長より親の仇敵大岡正治と擊取らんと艱難辛苦の甲斐あつて上野の戰爭利を失ひ立退く折ゝ擊取りし最期の際に正治の遺托我よ一人の妹あれバふん身の保護を賴むのみと言れし詞ゝ忘れねど深痍よ弱る虫の息所在ゝ素より名前さへよくも聞かねたれバ尋ぬる術おくるのまゝよして過去し正治が妹ゝおん身ありしと知らで結びし赤繩の解よ解かれぬ仇敵同志ふん身の爲よゝ兄の仇わが身の爲よゝふん身ころ父を擊たる仇敵の片割互ひよ許さぬ恩と義の仇なる契り遂ぞもあれ永くふん身と添れんや篤と考がへ應答せよ我ゝ父の當の敵正治を擊て怨みゝ晴たりふん身ゝ我ゝ兄を擊れ我を仇とー怨まれあバこのところよて擊れもせん是ゝまたりゝ玉どの平生の男々ーき心ろよ似ぞ女々しく泣くゝなよごとぞ分別あれと屬ま

し立つる情義も深き六輔の詞を聞て薄紫のゝ玉ゝやうノ〳〵涙を拭ひ卑妾に兄さんの在ぞとゝ今の今まで知らざりし丹も卑妾ゝ三歳の時勾引されて夫から夫と人買の手に渡り七歳の時よの樓に賣渡され浮む瀬あらぬ苦海の波よ浮つ沈みつ漂よひつ辛き勤めよ年闌て世は改たまる明治の聖代解放ーの春よ逢ひ籠を飛出た自由の鳥翼を伸て身動きもまゝにならぬゝ浮世の習ひ親元をてゝ素よりおく嫁な人に引取られ氣兼苦勞をしやうより寧ろ此樓よ氣まゝ勤めお前の爲よもよからうと內所の旦那が親切よ言てくだされる詞よほだされ今日さで勤めて居るうちも此臍の緒を見るよ付け實の父さん母さんは何處よどうして居らるゝやらと人を賴のんでお踪蹟を搜したれどもいくれ去れず貴郎の話しよ聞て驚愕兩親は素より兄さんも今は此世よなき人の數よ入ーぞ悲ーくも嘆かはーき限なれど言て返らぬ兄の最期人

を殺せバ殺さるゝ人の怨みゝ仇とし狙はれるん身ゝ撃れて死失しも前世の約束身の因果と思ひ諦らめ侍るかし加之ならず兄さんが貴郎ゝ私しの身の上をバお遺托申せしと聞のらは卑妾の爲ゝい恩あるお人ゝの御恩と仇として何で貴郎を恨みませう知らぬ事とは言ながら綾にからまる怪しき赤繩結ぶは夢か夢の世に捨去られたる果敢なき此身を哀れと思したまはらバ行末永く見捨ずゝト跡は涙ゝ口籠る其實面ゝ現はれて結ばる恨も今爰に春の氷と解てまた再たび結ばる妹と脊の契を全たふするや甚麼そはまた例の次回ゝ譲る皆さん御推察を願ひ升

○第二十二圓

されば仇敵同志れ怨も解け結ばる縁の怪しくも見捨たまふな見捨と深くも契る兩個の中と小松樓の主個が斯と聞き義侠ある者あれバ

薄紫ゝい前借の金い素より幾干かの預かり金さへある事ゆゑ夫ゝて萬事の支度を調のへ己れ自から親元とも媒介ともありて六輔の妻ゝ送りし殊勝の擧動また難有き事ありと薄紫と六輔い主個の好意を深く謝し夫婦となりて睦ましく前回ゝも言る如く書林と營なみ居たりしが待ぬ月日い過易く爰ゝ四年の年を經て明治十二年の四月中妻のお玉い六輔の情の種を身ゝ宿し月の經水を絶て見せ娼賣せし身の孕らひと云も怪しきまでゝ最嬉しと夫婦の喜悦一方ならぬ分娩る日を待不樂しゝ月滿日經て翌年一月産落せしい男子なり蟲氣もあゝず肥立ゝぞ頓て三次郎と稱名つゝ揷唄の花掌裡の玉と慈愛くしみて育つる中妻のお玉い産後の肥立一旦快よくありたりしも人い病の器とか引續いての浮羅〳〵病藥餌の効驗も更になく四月中旬夫と我子ゝ死別れ返らぬ旅ゝ赴むきしかバ六輔い最愛の妻を失なふのみならぬま

だ乳呑兒の三次郎さへ置去られたる一時の當惑靜岡よりも此年おろ住わびたれば寧その事生れ故郷の東京へ出て右もわれ方向を付おんものと店を閉ぢ是まで節儉ゐ貯はへたる三百圓餘の金と携さへ是といふ目的もおく〳〵妻の墳墓ゐ暇を告て乳呑兒を抱つ抱へつ其處此處と貰ひ乳なして一人旅辛くして東京へ辿り着しゐ七月下旬馬喰町の旅人宿山城屋ゑ寄宿して昔の知己を尋ねしゑ或ひゐ落魄れ或ゐ出世でよき便も得ざりしかば一日二日と滯留中久しく見ざる東京の物珍らしきゑ淺草の觀世音へ參詣の折同所の奥山ゑて不圖なく廻り逢しいろの昔妹と思ひしお愛の素性聞ゞ全たく他人なりしと夢ゑも知らねば彰義隊の群に在たるろの砌松藥館にて襖越藝妓今若の身の上話し神保といふ聲の圖らぜ耳、ゑ入しより偖ゐ妹のお愛ゑゐ父、の家退轉の後藝妓となりていと細き三筋の渡世おすとゑ掾々逢て其後の事を

問もし語りもせんと思ふ甲斐おくろの翌日上野の戰爭利を失なひ別れ〳〵ゑなりたる後今日しも圖らぜ此所ゑて再會せしも蓋せぬ緣故ト第三回より是までの一伍一什を物語る六輔の言葉ゑ代て記者の文飾前後を合てお讀の程を偏ゑ願ふ是より話頭第一二回ゑ戻る却說ふ愛ゐ六太夫が人手ゑかゝる最期と遂げ神保の家退轉の後實の親なる神田三河町三丁目大山吉藏方へ引取られしが貧しき親を養なふため數寄屋町の藝妓となりし間もおく吉藏ゐ病死して今ゐ是なる母一人三年跡或お客ゑ根引されて母子もろともお世話ゑおつて居たるうち去年の暮一人の子を產落すとろのまゝゑ死去せし悲しみ果ぬ間ゑ旦那も此程沒故りて便少なき私し等母子お子樣を連て旅人宿ゑお在なさるゐ嘸御難儀幸はひ私しゑとの通り乳さへあれゞ私くし方へ御逗留なされませと言ゑ六輔去ゞ〳〵默頭き。开ゐ願ふてもおき幸甚ゑと

そト相談頓ゑ一決し京橋鎗屋町あるゑ愛の住居へ去パし同居のかり枕月下氷人の商業ゑや今いゑ愛も一人身也六輔もまた後妻を尋ぬる折ゆゑ末遂ゑ夫婦とありて九月中六輔い或舊知己の周旋にて静岡縣の四等屬を拜命し先頃任地へ赴むきしといふ綾ゑからまる怪しき因緣思ふゑ離れ思はぬに逢ふ始めの兄妹い兄妹あらで垢の他人の素性を洗ひ妹脊の契り今爰ゑ目出度納まる大團圓拙あき筆ゑものし畢んぬ

人情美談 日本氣質後編終

版権所有

明治廿二年三月廿日印刷
仝　年仝月廿日出版　（定價金八錢）

編輯兼發行者　長野縣平民　山崎杲平
東京々橋區銀座一丁目八番地

印刷者　東京府士族　吉田錠次郎
東京神田區淡路町一丁目壹番地

賣捌全國各書肆

大賣捌所

東京淺草區三好町　大川錠吉

仝　神田區富山町　開進堂

仝　日本橋區通四丁目　明進堂

長野縣信濃國松本大明町
大川錠吉支店　小岩井禎十